

第四章 一九三七年乃至一九四〇年頃の対ソ作戦計畫

第一節 作戦計畫策定上の基礎条件

この期間滿洲に於ける日ソ兩軍の作戦準備は著しく進捗した。それは兩軍の常駐兵力の増加、國境陣地の強化、交通網、兵站施設、飛行場の整備等である。極東ソ軍及國東軍兵力充實の状況は附表第三、第四の如く一九三七年及一九三九年に於ける極東ソ軍の配置は附圖第一、第二の如くであつた。

ソ軍は一九三七年以降その航空兵力を對期的に擴充し一九三九年に於てはソ連太平洋艦隊のものを合しザバイカル以東平時配置による總機數約二、五〇〇機と判断せられた。

(註一三) 當時に於ける國東軍司令部のソ空軍に關する判断は左の如くであつた。

「二、五〇〇機に相當する部隊の機種区分左の如し

重機

九五箇中隊

三〇

機爆

五九箇中队

襲撃

二九箇中队

戦闘

一一二箇中队

偵察

一〇九箇中队

口二、五〇〇機に關する滿洲の方面別配置左の如し

東正面

約二二〇〇機

北正面

約六〇〇機

西正面

約七〇〇機

三 駐守航空兵力集中判断

(1) 開戦後約二週間に於て歐ソ方面より増加する兵力の先

頭はチタ附近に現出するである

(2) 爾後約一箇月間に二五〇〇機内外の兵力が極東に増加

せらるるである

(3) 開戦後第三箇月初頭までに更に三〇〇〇機以上を極東

に増加し得るであらうがこの数は國際情勢特にソ連西隣諸邦の動向に左右せらるるであらう。

(4) 極東に於けるソ連軍常時活動の限度は飛行基地の能力

上四、〇〇〇機内外と判断せられる。

ソ軍は一九三二年頃より國境陣地の構築に着手し一九三四年には土門子、東寧、綏分河の正面にトーチカ陣地を構築し漸次之を延襲連接すると共に縦深ある陣地帯を構成しその北方に於ては興凱湖西方地区よりイマン正面に亘り、北正面に於ては黒河正面に夫々陣地を構築した。随つて日本軍は攻撃實施の爲陣地の間隙を突破する構想は逐次望なきに至り陣地戦攻撃の要領を採らざるを得ざるに至つた。

一九三八年頃に至つてはウスリ州方面のソ軍後方陣地帯がダウビ河谷（ウスリ鉄道東方約六〇軒）に構築せられ又海岸線には上陸可能の正面に悉く防禦施設が施された。かくて沿海州は正面約五〇〇軒縦深約一〇〇軒を有する近代的要塞の相貌を呈した。

滿洲國境に於ける日本軍の國境陣地は一九三四年より逐次之が構築を
 開始し一九三八年には東寧、綏芬河、半截河、虎頭、霍勒莫津、愛輝、
 黒河、海拉爾の八箇所に永久陣地を概成して同年各々國境守備隊の配
 置を完了し一九四〇年には更に五家子、鹿鳴台、觀月台、廟嶺、法別
 拉の五箇所に之を擴張し國境の戦略的要点には概ね陣地の構築を完了
 した。

前章に述ぶる如く日本軍の作戰計畫は東部國境に攻勢を執つて第一期
 作戰を指導するものであり一九三三年以後に於ける日本軍の作戰準備
 は悉くこの計畫の上に立つていた。然るにソ軍の対応策は周到を極め
 上述の如く要塞化を見ることがなつたため日本陸軍の作戰計畫上ソ軍
 陣地の全縦深の抵抗を打破する為に數箇月を要することとなり、この
 間ソ軍後続兵團がハバロフスク方面より興凱湖方面に増援することを
 考慮せられイマン方面の作戰を重大視せざるを得ざることとなつた。
 かくウスリー州方面の殲滅戰の計畫が逐次困難を加へ随つて第一期

戦の所發期間永びき北正面及西正面に向つてする兵力の二重使用は
 困難性を増加した。他面彼我兩軍の常駐兵力の増強は戦場に於ける兵
 力集中を容易ならしめ且彼我ともに鉄道、船舶等交通機關の整備によ
 りこの傾向を更に助長した。その結果勢い第一期、第二期會戦の間隔
 を短縮する傾向となつてきた。之が対策として日本軍は滿洲常駐兵力
 の増強、集中輸送速度の増加、西正面持久力の強化等を要することと
 なつた。

B表

方 面	ソ 軍 (五〇箇師団)		日本軍 (三三箇師団 騎兵集団一箇)	
	開戦時	二箇月後	開戦時	二箇月後
東 正 面	一二	一八	五	一八
北 正 面	四	一〇	二	三
				四箇月後
				一八
				六

西正面	六	一二	二〇	騎兵集團二	騎兵集團一	騎兵集團一
未集中師団	二八	一〇		二六	一〇	九

三五

一九三七年に於ける滿洲鐵道の状況附圖第三の如くであつた。

滿洲國政府は一九三五年より北滿鐵道を買収し南滿鐵道と同一の軌間に改修し得たので全滿の一貫輸送が可能となつたが新京（長春）以南の旧滿鉄幹線のみが複線でありその以北は單線で而も整備不十分なるため輸送量が低かつた。当時哈爾濱端末に於ける輸送日量は最大限二分の一師団程度であつた。

第二節 全改作戦計畫

この期間に於ける海ソ作戦計畫は毎年概ね同一構想のもので一九三三年乃至一九三五年の一般構想を繼承したものであるが作戦の終末線を

ルフロウ、大興安嶺の線に改めた。本期間の範例として一九三七年度
關東軍作戦計畫及大本營策定の一九四〇年度対ソ作戦計畫の大綱を掲
出してみると左の如くである。

第一款 一九三七年度關東軍作戦計畫の大綱

第一 作戦方針

一、關東軍は開戦勢頭在 滿兵団の主力を以て東部國境方面の要点を占領
確保し陸軍主力の集中を掩護したる後南部沿海州に進攻し極東ソ軍
主力を求めて之を撃破する。

二、此の間北正面及西正面に於ては持久を策する。

三、南部沿海州に敵主力を撃破せば一部を以て占領地域を安定確保しつ
つ主力を北正面又は西正面に転用し、滿領内に進攻すべき敵を求め
て之を撃破しルフロウ、大興安嶺西麓の線に進出する。

第二 作戦第一期の兵力部署

一、在滿兵団

0049

0049

1. 東正面（第二、第四、第八、第十二師團）

三七

当初第二、第八、第十二師團を以て必急派兵（註1受令後六時間以内出勤）により東寧、綏分河、密山方面の国境要点を占領確保せしめる（註1平時より準備せる国境築城を骨幹とする防禦）次で第四師團を以て之を増強する。

2. 三江省正面（騎兵第三旅團）

騎兵第三旅團を以て要点を占領し持久を図る（註1此の方面には敵大兵團の進攻を豫期せず主として匪賊的遊撃戦があるものと判断する）

3. 北正面（第一師團）

第一師團は黒河陣地及壕壕陣地附近によりて持久する（註1黒河正面に於ては二乃至三箇師團の敵が黒龍江を渡河し攻勢を取るものと判断する）

4. 西正面（騎兵集團）

騎兵集團を以て滿洲里、海拉爾間の鉄道及道路を徹底的に破壊し
つつ地域による持久を考慮し大興安嶺西麓に於て海拉爾築城の批
抗と相俟つて敵の前進を遲滞せしめる（註一）ソ軍二乃至三箇師
團及戰車一乃至二箇旅團の進攻を豫期する）

二内地及在鮮兵團の集中

内地及在鮮兵團は動員下令後七日乃至一〇日の間にその先頭内地港
灣及朝鮮蔚屯地を出発し主として京釜線、京義線、安奉線並に京
元線、元山―咸興線により一部を以て大連經由南滿幹線を利用して東
部正面牡丹江周辺に逐次其の主力を集中する。第一次輸送兵團の牡
丹江到着は動員下令後一〇日頃より約四〇日に亘る。(註二)
その兵力及使用方面は概ね左の通りである。

- 東正面……………一五箇師團……………決戦
- 北正面……………三箇師團……………持久
- 西正面……………二箇師團……………持久

豫備……………一箇師團（第二次輸送部隊により増強せられる）
 合計……………二一箇師團

三九

（註一四）内地及朝鮮より増遣せらるる第一次輸送部隊は師團一六箇（近衛、第三、第五、第六、第七、第九、第十、第十一、第十三、第十四、第十六、第十八乃至第二十、第百一、第百八師團）航空、重砲、戦車部隊の主力及後方補給部隊である。即ち作戦第一期に於ては在滿五箇師團と右の一六箇師團との合計二一箇師團を使用する。

（註一五）当時動員は、表の如く四次に計畫せられ動員間隔（註一）動員間隔とは、次に亘り動員を下令する場合の下令間隔日数をいふ）一五日であつた。

三航 空

在滿航空兵力約二〇〇機内外を以て開戦劈頭敵空軍に対し攻勢を執

四〇

表

次区分	動員完結日	兵力	備要
第一次	開戦第十五日	一二箇師團	在滿師團七箇及甲師團五箇
第二次	開戦第三十日	九箇師團	甲師團五箇及乙師團四箇
第三次	開戦第四十五日	八箇師團	乙師團八箇
第四次	開戦第六十日	四箇師團	乙師團四箇

備考
 一、甲師團は常設師團にして編制、裝備優良なるもの、
 乙師團は特設師團にして編制、裝備甲師團に次ぐものである
 二、本表の他毎次多戦の軍直轄部隊を動員せられる計畫であつた
 が之に關しては省略する。

り朝鮮及内地より逐次増加せられる兵力を以て攻撃を反復し制空権を確保するに努める。その総兵力は約五〇〇機と豫定する。

海軍との作戦協定により対米戦発生の考慮なき場合に於ては北鮮及延吉周辺の基地を利用し海軍爆撃機一部の増加協力を期待する。

航空兵力の展開は主として東正面の後方地域とし牡丹江周辺、延吉周辺及北鮮を基地とし重爆撃機は哈爾濱周辺を基地として殆んど全力を以てハバロフスク以南の東正面の敵空軍基地を攻撃する。北及西正面の地上作戦に対しては一部を以て適時協力する。

第三 作戦第一期の作戦指導

一、東正面

勤員第三十日頃日本内地及朝鮮より増加せられる兵團主力の集中を待つて攻勢を開始する。その部署は第三軍（六箇師團）を以て東寧正面より第五軍（六箇師團）を以て綏芬河正面より各々国境陣地を突破しウオロシロフを共同の戦略目標として進攻し敵極東軍主力を

捕提擧級する。

此の間一部を以て半截河方面に於て左側背を掩護せしめる。戦略豫備（二箇師團）は適時決戦方面に投入して戦果を擴大する。

ウオロシロフ周邊に敵を擧級せば第三軍は主力を以て浦鹽方面に備へ一部を以てダウビへ河谷方面に突進急追する。

第五軍は北面して進撃しイマン方向に戦果を擴大する。

浦鹽要塞を眞面目に攻略すべきや或は一部を以て監視すべきやは情勢によりて決定する。(註)

（註一六）浦鹽要塞の攻略に關しては一九三六年度の作戦構想に於ては攻略資材及攻城兵刀等の關係上開戦第一年は監視に止め翌春以降攻略するを至当とするものと考へられていたが一九三七年度の構想に於ては海軍側の切なる要望によりウズリ州方面の敵を撃破したる後成るべく速に攻略することを考慮せられた。

彈春方面の作戦は朝鮮軍之を担任し当初彈春守備隊を以て持久せしめ爾後一箇師團を加へポシエツト方面に攻勢を取り關東軍に策応する。

(註一七) 彈春方面の作戦指揮を關東軍司令官に統一せられたのは張鼓峯事件(一九三八年七月、八月)の末期であつた。

航空部隊は開戦後約一箇月間に概ね敵空軍主力を撃破し爾後主として地上軍の作戦に直接協力する。

戦車兵力は地形の制限大なるに鑑み固境突破後の進撃及戦果擴張に充當する目的を以て混成機械化旅團を戦略豫備に控置する。

東正面の決戦は開戦後概ね三乃至四箇月を以て一段落するものと豫想しその後一部(約三箇師團)を以て浦闡要塞に備へ約五箇師團を以てハバロフスク以南沿海州の要域を確保し爾余(七箇師團内外)を第二期作戦の爲に齊々哈爾方面又は北安方面に抽出転用する。

北正面

黒龍江対岸の敵は約三倍の優勢を以て開戦初頭より攻勢を取り来るものと判断し第一師團の一部を以て黒河南側高地及奇克特附近を確保せしめ師團主力は之を孫吳周邊に控置して適時攻勢を執り敵の兵力分離に乗じ之を撃破し持久任務の達成を図り動員第六十日頃迄に更に二箇師團を増加する。

敵の増強に伴い止むを得ざれば小興安嶺を利用して逐次抵抗により持久を策し龍鎮、北安間にて極力敵の南進を遅滞せしめる。

三西正面

海拉爾に駐屯する騎兵集團に環かに一箇師團を増加し次で開戦第二箇月迄に更に一箇師團を増加して滿洲里、海拉爾、興安嶺間の長大なる地域を利用し海拉爾築城の固守と交通破壊とにより持久を図り最悪の場合に於ても大興安嶺の線を確保する。(註一八)

(註一八) 大興安嶺には歩兵部隊は勿論車輜部隊の通過可能なる進路四条あり真剣なる敵の突進に対しては騎兵集團のみを

以て所望の時間持久し得る公算は大ではない。

四五

四条の道路左の如し

(1) 嫩江—奈勒穆図道（補修を要する）

(2) 北滿鉄道に沿う道路（自動車道）

(3) 索倫—阿爾山道（自動車道）

(4) 右二条の中間を塔爾斯興安峠に通ずる道路（補修を要

する）

第四 作戦第二期の作戦指導

一、作戦構想

概ね四箇月を以て第一期作戦を終了したる後一部の兵力を沿海州地区に配置して戡定竝に治安維持に当らしめ主力を西及北正面に転用する。此の間内地よりする新鋭兵團を加へ第二期戰場を非結氷期に於ては大興安嶺方面に結氷期に於ては小興安嶺方面に求め決戦を行

う。

(註一九) 第二期會戰の戦場を河に求めんかは時代により變化し

た。この頃には海拉爾の築城が相當に強化せられたことを前提とし、與安嶺を越えて海拉爾周邊に戦場を求めんとする思想が抬頭した。

三、使用兵力

第一期作戰間、東軍收略豫備に内地より増派せらるる第二次以降の動員兵力を加へ之を北正面及西正面に増強すれば、其の兵力合計師團一五箇、騎兵集團一箇(北正面に六乃至九箇師團、西正面に九乃至六箇師團及一騎兵集團を充当する)となる。之に東方正面より転用する七乃至八箇師團を加へ合計二二乃至二三箇師團となる。(20)

(註二〇) 此の兵力は勿論その全部を使用し得るものではないが、計畫上に於ては約二〇箇師團に近いものが考へられていた。我が軍の戦力、素質は第二次以降動員の二流師團或は第一期作戰に於て戦力を消耗したる良好ならざるものなる

に反しソ軍は歐羅より増派せらるる精銳兵團を主体とし
るものである。従つて第二期作戦の指導は慎重ならしめ
極力大なる兵力を棄甲することを必要とした。

三、第二期作戦の終末

第二期作戦を滿洲内に於て開戦第一年に豫期の通り終了し得る場合
には悉く各一部を以て黒河以北及海拉爾以西に敵を追撃し同地附
近を確保して越冬滞陣すべく約二〇箇師團の主力は小興安嶺以南、
大興安嶺以東の北滿平地に於て越冬し、翌春を待つて主力を黒河正
面に一部を以て海拉爾正面に進出し豫定の進出線たるルフロウ、大
興安嶺山麓に迎撃態勢を整へる結果になるであろう。万一対ソ開戦
の時期が六、七月頃になる場合第二期會戦が年内に終らずして翌春
に待越すに至りその終了後引続き黒河、海拉爾方面に進撃し年末迄
にルフロウ、大興安嶺の豫定線に進出することゝなるであろう。何
れにしても同線を越えて更にチタ方面に大軍を進めぬことは当時の

1900

陸軍の實力、特に後方補給力に於ては全く不可能と見るべきもの
かあつた。

第五 補 給

一、滿洲に於て自給し得るものは馬糧の全部、人糧の一部（主として副
食）翌冬用薪炭、木材等の物資と滿洲人馬を以て編成する輸送縦列
の相當量であつたが豫定する戦場附近の大部が不毛地なるため隨時
隨所に収養すること困難にして大部を後方地帯の南滿に求めなけ
ればならなかつた。戦場が不毛地なることは單位補給日量を膨大に
らしめ特に冬季に於て著しく勢い行李、輜重の膨張を来し推進距離
の短縮、軍行動の鈍重を免れなかつた。
主食の大部、ガソリン、弾薬等は殆んど全部を日本よりの追送に俟
たねばならなかつた。

一九三六年、一九三七年頃陸軍として現地に集積し得たものは糧
秣、弾薬共に約二〇箇師團の一會戦に應ずる量に過ぎなかつた。そ

0061

の集積位置も奉天、新京、哈爾濱等が主体であり牡丹江、北安、齊々哈爾等には一部が推進集積されていたのみである。而もその補給率に極めて低率であつた。又之等の充足整備が幾多の假定的要素の上で立つ総動員又は車需動員計畫に依存していたので戦争発起の狀態に依つてはその補給計畫實現の成否に疑問さへある状況であつた。

三、貨物自動車は全車を合せても約七〇〇輛であり民間のものを徵發利用するとして一〇〇〇輛を越え得なかつた。従つて之を以て約三三箇師團の常統補給をなすことには頗る困難であり而も鉄道輸送を主体とする為鉄道の端末から離れて作戦する範圍は極めて限られていた。

兵站輸送機材の主体をなす地方縦列（註一現地住民及現地の車馬を主体として編成する輸送部隊の名稱である）の大部分は南滿に存在していたので之等を收集整備し遠く第一線に送致して運用するが為非常なる困難を感じていた。

唯後方機材の使用すべき人力（畜力）は比較的豊富に現地特に南滿

に於て徵用可能であつた。

三 越冬のための老成なる新兵は北滿に於て比較的豊富に収集利用することが出来る見込であつたがそれらに寧ろ還搬後援の不足に陥路があつた。

四 滿領内の道路は素質甚しく不良で特に解氷期雨季対策に缺陷多く軍の後援、補給に大なる支障を免れなかつた。

五 ソ聯領内に進出以後の重大問題は滿領とソ領との境界に於て無遠慮地帯がゐることであり之を急速に連接して進駐兵國の後方補給に遺憾なからしめる爲には道路構築隊の相当数を準備しなければならぬことであつた。

六 作戦終末線に幾何の兵力を展開し得るかに就ては日本軍の存する各種輸送機関の故及能力貧弱なる爲寧ろ敵側鉄道の修復利用、黒龍江の水路利用に俟つ所多く従つて最遠なる作戦線の端末補給力を數字的に豫想することの困難で終末点の一舉躍進の如きは過望であつた、

五〇

第二款 一九四〇年度大本營對ソ作戰計畫の大綱

五一

第一 作戰目的

日本陸軍初期の作戰目的は極東に於けるソ軍を撃破し併せてルフロウ附近以東及大興安嶺西麓の線以東の地域を確保するに在る。

第二 作戰方針

一、南滿蒙頭陸軍航空部隊は海軍航空部隊と協同して東正面の敵航空勢力を撃滅し、次いで北正面の敵航空勢力を撃滅する。

二、關東軍は兵力の集中及戦力の整備に伴い攻勢を開始し主力を以て先づウスリー方面（概ね興凱湖及ウオロシロフ附近一帯の地域を指す）の敵を撃滅する。

此の南北正面及西正面に於ては一部を以て持久を策する。

關東軍主力の攻勢に方りては航空兵團は適時主力を以て地上作戰に協力する。

三、ウスリー方面の敵を撃滅せば關東軍の主力を転用し北正面及西正面

0064

0064

の敵を撃破してルフロワ附近及大興安嶺西麓の線に進出する。

第三 作戰要領

(註二二)一九四〇年度の対ソ作戰計畫に於ては豫定以上の作戰兵力をD表の如く豫定された。而して之が為當時行はれつゝあつた中東方面の作戰區域を收購して一〇箇師團以上の兵力を滿洲方面に活用することが考慮されていた。

D 表

合 計	増加兵力		第一次兵力		兵 刀 (師 團)
	一、内地より滿洲に増加する兵力	二、状況により更に中東方面より滿洲に増加する兵力	一、現駐在滿兵力	二、動員第三十日頃迄に内地及中國より滿洲に増加する兵力	
四二 乃至 四三	七	三 乃至 四	一 二	二 〇	三 二
五 二	一 〇 乃至 一一				

一 航空作戦（本章第三節第二款参照）

二 第一期作戦

ノ 東正面

(1) 第一方面軍（二〇個師團基幹）は兵力の集積及戦力の整備に伴

い主力を以て左の如く攻勢を開始し、ウズリ方面の敵野戦軍主力を殲滅する。

第三軍（五個師團基幹）

主力を以て東寧正面より敵国境障地南翼を突破し爾後ウオロシロフ方面に攻撃する。

第七軍（三個師團基幹）

第三軍に連繫して東寧南方地区より攻勢を開始し敵国境障地外をウオロシロフ方向に突進する。

第五軍（五個師團基幹）

イマン附近に於てウズリ―鉄道を分断すると共に主力を以

て興凱湖東側地区よりウオロシロフ方向に突進する。

第三、第七、第五軍は相策応して敵野戦軍主力をウオロシロフ平地に捕捉撃滅する。

(ロ) 琿春兵團（一箇師團基幹）は琿春、土門子間に於て邊境を突破しバラバシ附近以南南部沿海州の敵を撃破して方面軍主力の作戦を容易ならしめる。

(イ) 三江兵團（一箇師團基幹）は三江省方面に侵入する敵に対し方面軍主力の側背を掩護する。

(ニ) 方面軍豫備（四箇師團）は作戦の推移に依り之を所要の方面に投入して作戦の進捗を図る。

2 北正面

第四軍（四箇師團基幹）は黒龍方面（概ねブレイヤ河、ゼーヤ河各下流地域を指す）の敵に対し小興安嶺以北の地域に於て持久を策する。

之が為各固境陣地を支障とし敵の渡河に乗じて之が擊破に勉め止むを得ざるも孫吳附近を確保する。

五五

3. 西正面

第六軍（四箇師團基幹）はザバイカル及外蒙方面の敵に対し大興安嶺以西の地域に於て持久を策する。

之が為交通線の破壊と相俟つて海拉爾、大興安嶺間の地域に於て極力敵の前進を遲滞せしめ止むを得ざるも濱洲線大興安嶺頂附近を確保する。

共興東軍總隊備（四箇師團）は作戰の推移に應じ所要の方面に投入して作戰の進捗を図る。

三、第二期作戰

第二期作戰の要領は第一期作戰の推移、歐ソ方面よりの敵兵力増加の状況、我戦力、季節等に依り異なるも概ね左の如く豫定する。

1. 東正面

ウスリー方面の敵野戦軍主力を撃滅せば第三軍は浦鹽半島頸部を
 陥し浦鹽要塞の攻略を準備すると共に有力なる一部を以てダウビ
 へ河谷方面の敵航空根拠を覆滅し且ウスリー方面に於ける殘敵を
 掃蕩する。

第五軍（約三個師團）はウスリー鉄道に沿う地区よりハバロフス
 クに向い前進し同地を攻略する。

第一方面軍爾他の兵力は北正面又は西正面に転用する。

乙 北正面及西正面

(イ) 先づ北正面の敵を撃滅するを要する場合に於ては第二方面軍（第
 四軍を増強し十數個師團とする）を以て黒龍方面の敵野戦軍主
 力を撃破したる後一箇軍を以てルフロウ附近に進出して爾後の
 作戰を準備し、一部の兵力を以てハバロフスクに至る極東鉄道
 沿線地区を截定する。

黒龍方面の敵野戦軍を撃滅する迄の間西正面の敵に対しては第

六軍（要すれば兵力を増加する）を以て持久を策する。

五七

(四) 先づ西正面の敵を撃破するを要する場合に於ては第二方面軍（第六軍を増強し十数箇師團とする）を以て西正面の敵軍主力を撃破し大興安嶺西麓の線に進出する。

此の間北正面に於ては第四軍（所要の兵力を増加する）を以て当面の敵に対し持久を策する。

西正面の敵を撃破したる後に於ける北正面の作戦要領は当時の状況に依り定むる。

第三節 航空作戦計畫

本期間に於ける航空作戦計畫の範例として一九三七年度第二飛行集團作戦計畫及一九四〇年度關東軍航空作戦計畫の大綱を掲げる。この兩年度間僅かに三箇年に過ぎないのに第一節に述ぶる如く彼我の航空兵

方は共に急激に増加し日ソ兩國の關係は緊迫し作戰計畫亦この事實を反映して愈々周到となり構想上に於ては開戦初期の航空機滅戦を特に重視した。

第一款 一九三七年度第二飛行集團作戰計畫の大綱

第一 方針

飛行集團は開戦時頭主力を以てウオロシロフ地区の敵飛行場を、一部を以てマバスコエ附近の敵飛行場を奇襲し爾後連続果敢の攻撃に依つて敵航空兵力を撃滅し次でハバロフスク方面の敵飛行場を攻撃する。此の間ブラゴエシチエンスク及興安嶺方面に対しては僅少なる一部兵力を指向して成るべく多くの敵航空兵力を牽制する。

第二 戦術指導要領

一各隊は常駐飛行場より進発し第一撃を加へたる後牡丹江、勃利附近の飛行場に帰還著陸し速かに第二撃を加へる。但し状況之を許せば飛行第十二聯隊は吉林に、飛行第十聯隊は哈爾濱に移動して第二

準備することがある。
目標区分は表の如し。

表

備考	飛行隊		飛行集団				兵力	攻撃目標	帰還飛行場
	飛行第九聯隊	飛行第六聯隊	部一	主力	偵察一中	偵察二中			
◎印の飛行場名は現在資料がないものである	ウオロシロフ南方地区飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場
	ウオロシロフ南方地区飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場
	ウオロシロフ南方地区飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場
	ウオロシロフ南方地区飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場	ウオロシロフ附近飛行場

二、戦艦兩部隊は（偵察隊は爆撃隊に含む）協同の關係を以て進攻し
分進合撃する。

戦場上空の制空は爆撃指定時刻の直前より約二〇分間とする。

各隊に対する進攻命令には攻撃目標と爆撃時刻を明示する。

目標上空到達時刻は各隊をして之を厳守せしむるものとする。

三、第二飛行團は晴戦と共に飛行集團の幕下に入らしめられる。

四、海軍航空部隊は開戦初頭日表の如く飛行集團の作戦に協力する。

表

部	隊	兵力	攻撃要領
第一航空戦隊	(母艦兵力)	戦艦 二四機 艦 六機	艦上より発進しニコリスク附近攻 撃後北緯又は東滿飛行場に著陸
海軍基地航空兵力		艦 二機	ニコリスク附近攻撃後北緯又は東 滿飛行場に著陸

五 地上勤務、通信網の構成、戦闘司令所の開設等に関する事項 六一 (省略)

第二款 一九四〇年度陸軍航空作戦計畫の大綱

第一 作戦方針

軍は海軍と協同し、崩壊勢、極東ノ軍航空戦力を急襲殲滅する。
爾後其の抬頭を芟除しつつ主要なる地上作戦に協力する。又作戦初頭より一部を以て交通を遮断する。

第二 作戦指導要領

一 崩壊崩壊に決するや海軍航空部隊(2)は隱密裡に北緯及間島省に集中展開する。軍は石集中及展開を援助する。

(註二二) 海軍は中取、艦載、艦爆、陸偵、水偵合計約三五〇機を以て朝鮮及間島管内全飛行場を使用しウオロシロフ、ボルトフカを逐ぬる線以南(線上を含む)南部沿海州の敵

0074

0074

飛行場及沿海州特に浦豊方面の敵艦船の撃滅に任ずる計畫であつた。

三 開戦勢頭軍の航空部隊は予め準備する展開配置に就き海軍と協力し先づ沿海州方面の敵航空戦力を空地に求めて之を急襲撃滅する。之が為手段を盡して先制の必占に努める。

此の間黒龍州及ザバイカル州方面の敵航空戦力に対しては敵大型機を求めて之を攻撃し止むを得ざるも之が跳梁を制する。

三 内地、台湾及中国方面より到着する航空部隊は主として沿海州方面に使用を豫定する。

状況特に沿海州方面の敵機制壓の度に応じ右後続部隊は之を黒龍州又はザバイカル州方面の敵機に對せしめることがある。

四 沿海州方面の敵機を撃滅せば速に主力を以て黒龍州又はザバイカル州方面の敵機を撃滅する。

五 在極東敵航空戦力撃滅に先だち地上諸軍攻勢を開始せば当時の状況

に應じなし得る限りの戦力を以て之に協力する。

六 在極東敵航空戦力撃滅後歐ソ方面よりの後続部隊到着せば逐次其の
抬頭を芟除しつつ地上作戦に協力する。

七 開戦初頭より一部を以て黒龍州及ザバイカル州方面に於て交通遮断
に任ずる。

八 爾後の作戦指導は状況に應じ變化すべきも常に主動の地位を確保し
つつ全般の作戦に最大の奇襲を齎す如く運用する。

第三 兵團部署

一 開戦初期に於ける軍隊区分別紙第一の如し（省略）

二 軍は開戦勢頭航空兵團の主力を以て海軍と協同し先づ沿海州方面の
敵航空戦力を撃滅する。此の尙其の一部を以て黒龍州及ザバイカル
州方面の敵に對せしめる。

三 満軍飛行隊は主として満洲国内要地防衛に任せしめる。(四)

(註二三) 満軍飛行隊は戦時中隊六箇の兵力を有し新京、奉天、哈

百餘機を編成した。

四 特設輸送飛行隊は其の主力を航空兵團に配属し主として輸送、連絡
及滿洲國內治安維持に任せしめる。(附)

(註二四) 特設輸送飛行隊は滿洲航空會社の輸送機を以て輸送中
隊三箇を編成する計費であつた。

五 内地、台湾及中國方面より飛來する航空部隊は逐次其の到着に伴い
航空兵團長の指揮下に入らしめる。

日城子飛行学校部隊は講武と共に關東軍司令官の指揮下に入るこ
とを豫期する。之が實現に方つては即時航空兵團長の指揮下に入らし
める。

六 軍直轄補給修理機關は主力を航空兵團長の指揮下に入らしめる。但
し一部を以て移動修理機關を編成し其の大部を航空兵團長の指揮下
に入らしめる。

奉天航空廠は軍直轄とし在滿航空部隊の戦力培養に任せしめる外海

軍航空部隊及内地、台湾、中国より集中する飛行部隊を援助せしむる。

七、各航空教育隊を以て航空路部隊を編成して関東軍司令官直轄とし内地、台湾及中国より集中する飛行部隊又は補給役に供する航空路勤務を担任せしめる。

八、爾余の満洲國關係樹固は極力之が戦力化に努める。

(以下省略する)